# 〈時宜にかなわず死んだ子ども〉の追想

## ――怪火・甦らせの儀礼・葬送儀礼

嶋内 博愛

### 一 「子どもの死」の語り

今から一〇〇年、二〇〇年前、あるいはさらに昔のこと、世の中がたくさんの「ブラックボックス」で満ちあふれていた頃、科学の最先端から遠く離れたところで日々生活していた人びとは、日常目にするさまざまな出来事を、彼らなりのやり方で理解していた。雷が鳴れば、たとえばそれは雷神のイメージと重ね合わされたし、あるいは、誰かが病気になれば、その原因は、たとえば超自然的存在の祟りや呪力に求められた。社会によって説明の言葉は異なるものの、理解不能な出来事が理解不能なままにはおかれることはまずなかった。自分たちのやり方で理解しようと、可能な限り「合理的」な説明を加え、そしてそうした説明は、やがて、いわば説明不要の「公理」となり、ブラックボックスに入れられ、おそらくその多くは忘れ去られた。しかし一部はいずれかの段階で文字やかたちにとどめられ、今度はいわばガラスケースの中に入れられて、衆人環視の元、

修復保存されるようになった。

かつて人びとが不思議だと考えた自然現象は、現代では（ほぼ）解明されているといってよいだろう。太陽はなぜ東から昇るのか、日食はなぜ起きるのか、月に模様はなぜあるか。こうした不思議に対してされてきた説明を、科学的合理性を身につけた思考に照らし合わせてみれば、たいていの場合、その多くが「迷信的」なものにみえるだろう。筆者が集中的に取り組み続けている「不思議な光」、いわゆるヒトダマや鬼火、そしてＵＦＯに関する伝承も、こうしたもののうちのひとつといえる。

たとえば不知火の正体。これには、竜灯［下野: 1986, 102］、うかばれない魂「シバナ」［高木: 1957, 192］や、殉教キリシタン「おろくにんさま」の魂［川上: 2004, 13］だといったような説明が聞かれた。[1] 怪光・怪火は世界各地で報告されており、[2] しかもそれを人間の魂と重ね合わせる例も多い。[3] しかし、具体的に誰の魂なのかの説明となると、時や場所に応じてさまざまなヴァリエーションがみられる。筆者がフィールドとするドイツ語圏でも状況は似ており、その発生原因として、煉獄で浄罪する死者「燃える人（Feuermann）」であるとするもののほか、未洗礼の嬰児の魂と結びつけるものもある。たとえば以下のようなものだ。

【引用一　荒々しい火（Dar wille Füre）】

荒々しい火は、昔はよくみられ、踊っているかのように寄ってきたものだった。

ある男があるとき車で町を出て、夜、古い路傍の十字架の脇を通り過ぎようとしたときのこと。いきなり火の粉が飛び散り始め、彼の方にたかってきた。これはいったい何だったのか。彼は聖職者や「権威ある人物」にたずねた。彼らによると、火の粉の正体は洗礼を受けていない子どもの魂なのだそうだ。

［Henssen: 1935, 77, Nr.47/1］（引用文の訳文はとくに断りがない限りすべて筆者による。丸カッコ内は原

語表記、ないし筆者＝訳者による補足）

この伝承はドイツ北西部にあたるノルトライン・ヴェストファーレン州の中堅都市ミュンスター近郊で収集されたものだが、類似のモティーフはドイツ語のみならず、欧州各地で収集されている。管見の限りでいえば、引用一のように、子どもの魂を怪火現象（ignis fatuus ないし Irrlicht）と重ね合わせる例は、この手の民間伝承には少なからずある。怪火の発生理由を説明する際に、子どもの魂が利用されるのである。似たような例をもう一つみよう。

【引用二　ポンメルン地方の伝承】

鬼火（Irrlichter）は、洗礼を受けないまま死んだ子どもの魂である。彼らは最後の審判のときまで、水辺をさまよわなければならない。（口伝え）［Themme, J.D.H.: 1840, 339］

ポーランド国境に近い北ドイツのポンメルン地方で収集されたこの話でも、怪火現象と子どもの魂が関連づけられている。

実際、従来のキリスト教、とりわけ厳格なカトリックの神学に従えば、洗礼は、キリスト教徒としての命名つまり加入の儀式であると同時に、自罪とそれに対する罰、そしてなにより原罪を赦すものとされる。[4] 洗礼を受けられるのは生者だけだから、死産だったり、生きて誕生しても未洗礼のまま死んでしまったりすると、嬰児は、たとえそれが不可抗力だとしても原罪が浄められず、それゆえ祝福された地である天国への迎え入れはかなわないとされたのである。[5]

不可抗力で原罪を背負ったまま死んだ者たちが死後赴く場所として神学者が提供したのが、辺獄（リンボ）だ。そこはキリスト教神学によればたしかに地獄とは別の、もっと穏やかな場所とされたが、ダンテの『神曲』にみられるように、民衆的な理解によればやはり天国の風景とは全く異質で、あくまでもそこは「祝福されない者」が過ごす場だった。ことほどさように、洗礼は、キリスト教コミュニティへの加入儀礼として重要な位置を占めてきたのである。

たとえば、南ドイツの小市、受難劇で有名なオーバーアマガウに生まれ、弁護士を業とするかたわら、壮年になってからバイエルンを舞台にした小説をユーモアあふれる筆致で書いた作家ルートヴィヒ・トーマ（Ludwig Thoma, 一八六七～一九二一）が、一九〇五年に上梓した二〇章からなる中編小説『アンドレアス・フェスト（Andreas Vöst）』。その冒頭は、誕生死をめぐって教会の論理と遺族のやりきれなさがぶつかるエピソードから始まる。

秋の忙しいさなか、主人公である農夫アンドレアス・フェストの妻が出産するが、痛ましいことに嬰児は出産後間もなく緊急洗礼（後述）を施す間もなく死んでしまった。悲しみに暮れる農夫＝父は、その旨を村の司祭に知らせ、村の共同墓地に「普通に」埋葬してもらおうと頼み込む。しかしその望みは聞き入れられず、遺体は、教会墓地の脇に設けられた自殺者と未洗礼の子どもが埋葬される区画に埋葬されることになった。死んでしまった嬰児のために墓掘りがぞんざいに掘り返した墓穴は、あまりにも惨めなものだった。そして肝心の葬儀の様子は、作中で以下のように描写されている。

【引用三　アンドレアス・フェスト　第一章から】

（司祭のところに行ったのとは）別の日の早朝、異教の子ども（Heidenkind）は埋葬された。（教会の）

鐘は鳴らず、司祭（Priester）が祈禱文を読むこともなかった。

小さな棺を担いだのは産婆（Hebamme）だった。それに続いたのは、（赤ん坊の父親の）農夫と年老いたヴァイス、それからハーバーシュナイダーだった。

その他には誰もいなかった。

墓掘りのカスパーは無造作に棺を墓穴の底に置き、土くれを放り込み、（掘り返す前にその場所に生えていた）草をそこに重ねた。

「十字架をかけちゃならんのだろうか？」農夫はたずねた。

「だめだね」とカスパーはいった。「それはいかん、おまえは何を考えとるんだ」

「なにも。もういいよ。もう帰る！　もうやることはなんにもない！」彼は踵を返した。ほかの者たちもそれに続いた。[Thoma: 1956, 42]

たとえ両親が善きキリスト者でも、死産や流産を経験しないとはいえない。待ち望んだわが子が時宜を得ずに死んでいたことが判明したとき、遺族が受けたショックを緩和する術を、厳格なカトリック神学は持ち合わせていなかったのである。持ち合わせていなかったどころか、むしろ「傷口に塩を塗る」ように、ショックを倍増させさえした。

しかし教会は、実践レヴェルでもここまで冷淡だったのだろうか。いささか前置きが長くなってしまったが、本稿の主テーマは、我が子の死後の安寧をいかに願うかに関する実践の社会的意義を、歴史的事実に照らし合わせつつ検討することにある。結論を先取りしてしまえば、さまざまな奇跡的な物語を紡ぎあわせることで、キリスト教サイドもなんとか嬰児を、より正鵠を期していえば嬰児の遺族をすくい上げていたし、そして現在

では、状況はより自由度を増しているのである。

## 二　洗礼について

ところで、そもそも洗礼とは何か。ごく簡単にまとめれば、キリスト教の信者となるための通過儀礼であり、一生に一度だけ施される。この儀礼により、原罪と自らの犯した（これから犯す）罪とそれに伴う罰が赦されるのだとキリスト教神学では説明され、洗礼名が授けられる。洗礼の後はキリスト教徒のコミュニティのメンバーシップを得る。本稿のテーマとの関連でいえば、いうまでもなく、「洗礼を受けられるのは生者だけである」という点が重要だ。誕生死してしまった嬰児や、生まれて洗礼を施す間もなく死亡した場合は、キリスト教コミュニティからは締め出されてしまうからだ。

健常に出産しそして発育しているのであれば、洗礼は教会でしかるべき聖職者により執り行われるものだ。現在でも洗礼式は、子ども（＝当事者）の親だけでなく、一般的には祖父母や親類縁者までも立ち会う晴れやかかつ重要な通過儀礼となっている。しかし、異常出産の場合は洗礼式を待ってはいられない。「緊急洗礼（Nottaufe）」と称して教会の堂守（Mesner）やときには助産師が、子どもが生きているあいだになんとか洗礼を施すことがあったし、それが認められていた。引用三の農夫アンドレアス・フェストの子どもも、もし出産が秋の忙しいさなかでなければ誰かが妊婦に付き添ったはずで、そうすれば緊急洗礼が施されたはずだった、と別のところ［Thoma: 1956, 38］で述べられている。

## 三　南チロル、リフィアンの絵馬から

緊急洗礼という方法でもすくい上げることができないのが、誕生死の嬰児である。生まれた時点で死んでいるから、洗礼を受けさせてやれない。科学的な思考、つまり、生物としての死が不可逆的な過程であるという客観的事実に照合すれば、誕生死した嬰児への洗礼は不可能だ。しかし、キリスト教的な理解では、宗教的な奇跡の力を借りれば、死者が（一時的にせよ）息を吹き返すことはあった。[6] こうした奇跡に望みを託し、そして成功した（と信じた）人がいたことがわかるのが、図1の奉納絵馬だ。誕生死だったが、その後無事に洗礼を受けさせたという奇跡を記念するものとして、南チロル（現在はイタリア領だが、伝統的にはドイツ語圏）のリフィアン（Riffian, イタリア語名 Rifiano）なる集落の教会に奉納されたものだ。リフィアンは、南チロルの中心地、かつてチロル王国の首都だったこともあるメラノから、[7] パッシリオ川伝いに五キロメートルほど上流の小集落で、教会の創建は一四世紀にまで遡る。ある日パッシリオ川に聖母マリアの聖像（Gnadenbild）が発見され、それを奉献して教会が建てられたのが、一三六八年のことだったという。[8]

絵馬をみてみよう。具体的な年号の記載

図1　南チロル、リフィアンの教会に奉納された絵馬
［Theopold: 1978, 79］から転載

はないが、ほかの奉納絵馬と比較するとおそらく一八〜一九世紀頃に制作されたと推定できる。じつに印象的な絵馬である。画面ほぼ中央に描かれているのは、西洋式おむつ（Wickel）に全身くるまれた嬰児、それを挟むかたちで左右に、喪服を着て跪き祈りを捧げる人物――夫婦だろうか――が描かれている。そして三人の頭上には、雲の中に浮かぶピエタ――嘆きの聖母とその膝に抱かれるキリスト――という構図がみえる。この絵をみるだけでも、マリアの呪的な力に感謝してこれが献納されたことが読みとれる。興味深いのは献納理由で、それは最下部にある文言から読みとることができる。

【引用四　奉納絵馬に書かれた文言】

（これは）誕生死の後埋葬されて四日もたった後、顔に美しいピンク色がさし、唇には鮮やかな血の色がみられた、つまり生命の確かなしるしがみえたので、洗礼を受け、教会墓地に埋葬されることができた子どもへの取りなしの祈りに対する、聖母マリアへの感謝を記念する銘板。両親から感謝をこめて。[9]

ここに書かれている話が細部にわたって真実かどうかはさておき、少なくとも以下のような事実があったと想定できる。つまり、ある夫婦＝この絵馬の献納者が子どもを誕生死で亡くしたこと。地元の司祭が、聖別された墓地への遺体の埋葬を拒んだこと。両親がリフィアンの教会の聖母マリアの呪的な力に縋り、それにより、死んだ子どものために何らかの儀礼が執行されたこと。埋葬の数日後、嬰児の遺体には、何らかの変化が認められたこと。その変化が「生命のしるし」と解釈され、そして洗礼が施されたこと。洗礼の後、遺体は聖別された墓地に埋葬し直されたこと――。

これらの事実をつなぎ合わせる際の「物語発生装置」［浜本：1985］となっているのが、聖母マリアの呪力、

奇跡をなす力だ。彼らは、この教会の守護聖人である聖母マリアが何らかの呪的な力をもつと信じたからこそ、その力に縋ろうとし、出生前に死んでしまった新生児のための代願を依頼したのである。科学的な発想をするならば、代願したこと自体が遺体に何らかの影響を及ぼすことはあり得ない。しかしこの絵馬にまつわる物語に関わった人びと（親、儀礼を執り行った聖職者、そしておそらくは絵馬の制作者も）は、嬰児の死体にみられた変化の原因を、儀礼の執行に求めた。彼らがわが子の死をなんとかして受けとめ、悲しみを昇華させるためには、我が子に洗礼を受けさせ、聖別した土地に埋葬してやることが一番の解決方法だったからだ。それゆえ、両親は聖母に縋り、リフィアンの聖母もそれに応えたのである。

## 四　「甦らせの儀礼」に関する記録

次にみる事例は、バイエルン南西部、アウクスブルク近郊の小さな集落ウルスベルク（Ursberg）が舞台である。[10] じつはこの町には、一七世紀から一八世紀にかけて、誕生死した子どもに洗礼を施すために息を吹き返させる「甦らせの儀礼」（Erweckungstaufe[11] ないし Bedingungstaufe[12]）を行うことで知られる修道院があった。年代記によれば、ここで上記のような儀礼が行われるようになったのは一六八六年以降だという。このように具体的な年号がわかるのは、縁起が記されているからで、この年、隣村バルツハウゼン（Balzhausen）の男性二人が、遠路はるばる南チロルのドロミテ渓谷中部のシュピンゲス（Spinges im Pustertal, イタリア語では Spinga）へ参詣に行ったところから話は始まる。二人はシュピンゲスで司祭に、なぜアルプスを越えてまでこんなところに参詣したのか、もしかして、あなた方の故郷の近くにも、ここと同じような強い霊力のある場所が間もなく現れるだろうという予言を知ってのことか、とたずねられた、とウルスベルクの年代記には残っ

ている［Prosser: 2003, 120-121］。二人がこの地に赴いたのは、ここの司祭（おそらくは Georg Stocker のこと。一六四一～一七〇九）がエルサレム巡礼の後に建てさせた、聖墳墓礼拝堂（Heilig-Grab-Kapelle）に詣でるためだったと記録にはあるものの、この礼拝堂がはたしてどんな霊力をもっていたのか、それに関する言及はない。とはいえ、「キリストが復活した地」の上に建つエルサレムの聖墳墓教会にあやかって建てた礼拝堂ならば、死者を甦らせる力をもつと考えるのは、妥当な判断だろう。

ともあれ、「ウルスベルクに甦りに効果がある聖像が現れるという予言があった」といううわさは瞬く間に広がり、それを聞きつけた近郊集落に住む夫婦が、子どもが死産したといって、遺体をもってウルスベルクにやってきた。じつはウルスベルクには、元々事故や火災除けに効果があるとされた磔刑像があり、シュピンゲスで言及された予言はこの聖像のことに違いなかろうと、彼らはその磔刑像の前で祈りを捧げることにした。祈禱を始めて四日目、子どもに変化がみえ始めた。昼光の元に晒されていたというのに、肌がピンク色に染まり始め、屍臭が消えたというのである。これを目にした者たちが、これは奇跡的なことだから教会に知らせた方がよいと言うので、ウルスベルクの高位聖職者が呼ばれ、彼によって生命のしるしがみえると認められたため、子どもには洗礼が施された［Gélis: 1998, 270］。中世の聖人伝にみられるような典型的な奇跡譚だ。奇跡のうわさは地域を越えて広がり、遠くボヘミアからも参詣者が来るほどだったと記録には残っている。

いったいどのくらいの数の小さな遺体がここに運び込まれたのか。それはウルスベルクの査察記録（Visitations-protokoll）から推測できる。それによれば、一六八六年から一七二〇年までの三五年間に二万四〇〇〇人が、つまり（この数字がそのまま信じるに値するかの検証はおいて）単純計算すれば、年間六〇〇人が運び込まれたという。また、一七二六年から一七五〇年までの二五年間には、奇跡ののちに洗礼を受けることができた子どもの数は一四二六人とある。〈甦った〉子どもは、「全依頼件数のうちの約一割に過ぎなかった」という洗礼

記録係の弁をそのまま信じて計算すると、やはりそれでも年間六〇〇人もの依頼があったことになる［Prosser: 2005, 139-140］。

しかし、ウルスベルクに依頼人が来るのは、冒頭でみた引用三のアンドレアス・フェストの場合同様、地元の司祭に洗礼を断られたからにほかならない。洗礼式は本来地元の教会で執り行うものであり、それは、キリスト教コミュニティへの加入儀礼であると同時に、とりわけカトリックでは、事実上、地元共同体への加入儀礼でもあった。それゆえ、ウルスベルクまで洗礼のために参詣するというのは、キリスト教的な規範からいわば逸脱した行為ととられかねない。こうした危険も、「甦らせの儀礼」は内包していた。

このような事情から、一七二九年には、この秘蹟がとうとうローマでも問題視されるようになる。発端は、オーバーラインのヴォルムス（Worms）から、未洗礼のまま一度埋葬された子どもの遺体二体が掘り起こされ、儀礼を受けさせるためにと数一〇〇キロメートルの道のりを経てウルスベルクまで運ばれてきたことにある。ウルスベルクでは、いつものようにいつもの儀礼が施され、その結果、二人には「生命のしるし」がみえたため洗礼を施し、そして遺体は地元の墓地に埋葬された。このニュースが、ヴォルムスを所轄するシュパイアー（Speyer）大司教で、現役の枢機卿でもあったシェーンボルン（Damian Hugo von Schönborn, 一六七六〜一七四三）の元に届いたとき、ことを重くみた彼は、ローマ教皇ベネディクトゥス一四世（一六七五〜一七八五、在位一七四〇〜五八）に事実を報告した。というのも、奇跡に妥当性があるかどうかもさることながら、地区の住民に洗礼を施すのはいわば地区の特権で、越境しての洗礼は越権行為だと彼が考えたからである。報告を受けた教皇は早くも同年、ウルスベルクやその他の町で「生命のしるし」とされるものは、秘儀を施す条件を満たしたものとは認められない、という布告を出す。しかし、ウルスベルクへの参詣者はそれでも後を絶たなかった。それは、現実問題として、子どもを亡くした人びとが、「甦らせの儀礼」を欲したからに

ほかならない。

その後、再三にわたって儀礼の禁止が通達されるが、黙認状態はしばらく続いた。しかし一七六四年にアウクスブルク司教区の定式書（Rituale Augustanum）が改訂された際には、禁止事項として、とうとう次のような文言が付加されるまでに至る。「死産した子ども（の遺体）を、例の恩寵ある場所ないし奇跡をなす聖像の置かれた場所に運び、見せかけの生命のしるしを理由に洗礼すること」[13]。ここまではっきり書かれてしまうと、もはや一教会のレヴェルでは手の打ちようがなくなり、以後この地での甦らせの儀礼は下火になっていった。

実際、同じような信仰を集めた地は、アルプス地方にいくつかあった[14]。いずれにしても、なにもしてやれないまま死んでしまった子どもの安寧を願う人びとの気持ちをすくい上げたのは、啓蒙思想に巻き込まれ杓子定規な対応しかできない地元の教会ではなく、こうした巡礼教会だったのである。

次に紹介したい事例は、スイスのアド・アルタ・ルペ（Ad altas rupes）である［Prosser: 2005, 141; Anderegg: 1979］。スイス南部、ユングフラウ山地南壁の小集落ビッチュ（Bitsch）郊外ツェン・ホーエン・フリューエン（Zen hohen Flühen）にあるこの小さな礼拝堂には、一八〇〇年頃まで隠修士が住んでおり、死んだ子どもを甦らせる儀礼を行っていた。どのように子どもが「甦った」か、その様子を、近郊の町出身の軍人が詳細に自身の回顧録の中に書き記しているので、それをみてみよう。

【引用五　回顧録から】

聖母マリアを賞賛するために、祈禱が捧げられる。子どもの頭部と顔が露わにされ、子どもに洗礼を施すための聖水を手にする（手にして待ち構える）。変化（の儀礼）の最中、細心の注意を払って、子どもの顔を見つめる。するとそのとき奇跡が起こる。子どものほほにうっすらと赤みがさし、目元や口元が動く。

これが起こらないことはほとんどない。その瞬間、手続き通りの洗礼の儀礼が執り行われ、次の瞬間には元の死んだ状態に戻る。礼拝がすむと、遺体は礼拝堂の脇のこぢんまりとした墓地に埋葬される。（中略）その後急いで家路につき、知らせを待っている不安でいっぱいの産婦にこう知らせるのである。「しるしがでた。あの子は天国に行ったよ」と。[Anderegg: 1979, 332]

こうしたいわば「迷信的」な行為が、再三の禁止にもかかわらず行われ続けたのは、すでに述べたように、教会が抱えていたジレンマ（一方でキリスト復活の奇跡を認めつつ、小さな「奇跡」は奇跡とは認めない）に、子どもを亡くした親たちが翻弄されていたからだといえる。

そもそも、依頼者たちは、ほんとうに、子どもが生き返ったと信じたのだろうか。

信じたかどうか、それを確認する術はない。ただ、基本に立ち返ればすぐにわかるのは、親たちが本来的に望んだのは、子どもの甦りではなく、子どもの死後の安寧だったはずだという点である。となると、依頼者にとって、死んだ我が子に生命のしるしが現れるかどうかは二の次、つまり洗礼を受けさせるための手段に過ぎなかったことになる。彼らが求めたのは、死んだ子どもの安らかな死であり、キリスト教コミュニティ受容のしるしが得られれば、「生命のしるし」の正体が何であっても、頓着しなかったのではないだろうか。子どもの死後の幸せを願う親の気持ちに、高位聖職者たちが情熱的に追い求めた宗教教義や啓蒙思想が入り込む隙は、なかったのである。

そしてきっと、洗礼を受けていないことを理由に、アンドレアス・フェスト（を書いたトーマ）の言葉を借りれば、「犬のように」[Thoma: 1956, 40] 粗末な扱いを受けるのは不当差別だ、彼らは心の奥底できっとそう主張したかったに違いない。だからこそ、こうした「聖地」には参詣者が絶えなかったのであろう。子ども

が「天国にいる」という聖職者からの確かな言葉、そして聖別された土地への埋葬があってはじめて、彼らにとっての「安らかな死」は保証された。儀礼自体は、引用五にもあるように、じつに象徴的（＝非科学的）なものだ。最先端の科学技術に身近に接しているものでなくても、常識的に考えさえすれば、「超自然的」ないし「迷信」的なものであることはおそらくすぐにわかる。しかし、教会の論理に巻き込まれていればいるほど、つまり、死後の救済と劫罰を信じるものであればあるほど、子どもを亡くした喪失感だけでなく、子どもが死後安らげないことをいたたまれなく感じたに違いないのである。当時科学との狭間でゆれたカトリック教会は、最も大切にすべき信心深い人たちの悲しみを受けとめることよりも、自分たちの守るべき理念をいかに浄化し、宗教的な対立相手に負けない論理体系を築くことに重きをおいた、といえるかもしれない。それは、植民地での活動のみならず、教皇庁のお膝元であるヨーロッパの内部でも行われていたのである。

## 五　乳児死亡率の高さ

また、こうした「怪しげな」教会が多数の参詣者を集める、社会的な要因もあった。現代でこそ新生児や妊産婦の死亡は一大事だが、医療技術が発達する以前は、成人まで成長できない子どもが数多くいた。これを図像資料からもみることができる。図2は、現在はヴィーンのオーストリア民俗学博物館（Österreichisches Museum für Volkskunde）が収蔵する奉納絵馬だ。画面の上半分には、図1と同様に雲の上のピエタが、下半分には跪いて祈りを捧げる大人が二人と子どもが一人、画面最下部には、西洋おむつにくるまれた赤ん坊が八人横たわっている。下段中央に書かれた文言を読めば、なぜこの絵馬が奉納されたのかがわかる。

【引用六　奉納絵馬の文言】

親愛なる神よ

（私たちの）子どもはあなたの元に八人もいます。九人目は私にください。一七九五年。[15]

子どもを産むたびに亡くし続けた母親の、何ともいえない切なさがこもった絵馬だ。考えてみれば、ヨーロッパでもつい一〇〇年ほど前までは、子どもの死は珍しいことではなかった。ある統計によれば、生まれた子どもの四人に一人は、乳離れをする前に死んでしまったというし、別の統計では、さらに高い死亡率を掲げているものもある。[16] いずれにしても、当時は、成人よりも子どもの方が、死に近かったのである。死んでしまった子どもに対しての過剰なまでの洗礼儀礼が繰り広げられた背景には、こうした事情もあっただろう。

ここから先はかなり慎重に言葉を選びながら続けるが、亡くした子どもを思って語り継がれてきたのが、たとえば引用二のような「水辺の怪火＝子どもの魂」伝承だったかもしれない。筆者はそう考えている。文字化された今でこそ、怪火の説明には、民衆的な理解とキリスト教的な要素――たとえば最後の審判や洗礼、引用文中にはないが、名付けなど――が融合し、全体のニュアンスとしては、「人間生活を脅かすネガティブな存在」という方向性のものが数多く

図2　奉納絵馬「次の子どもは生きますように」、オーストリア民俗学博物館所蔵
[Theopold: 1978, 80] から転載

みられる。だが、人びとが語り継ぎたかったのは、むしろ、キリスト教的なヴェールをはぎ取った下に垣間見える怪火解釈だったのではないだろうか。それは、たとえていえば、禁教時代の日本で密かにキリスト教を信仰し続けた人びとが心のよりどころにした聖像が、それと知らずにみれば何の変哲もない仏像にみえたのと、どこか似ているかもしれない。キリスト教的な解釈のヴェールはかぶりつつも、「水辺の怪火＝子どもの魂」伝承は、死んでしまった子どもを忘れないための記憶装置として語り継がれていたのではないだろうか。この伝承の共有によって、自分たちの方を向いてくれない教会では得ることのできない心の安寧を、語り継ぐ者は得ていたのかもしれない——。今はその可能性だけ指摘しておきたい。

いずれにしても、キリスト教の影響が生活規範にまで色濃くでていた時代のヨーロッパは、いかに都市部の知識人たちが啓蒙思想をかざし、産業革命のなかを邁進しつつ、「合理的」思考にくるまれているようにみえても、そのじつ、無垢な信仰実践の面では、こうした非合理がまかり通っていた。そしてそれは、むしろ、人びとが暮らした社会の方が、人びとに要請した非合理であり、人びとが自発的に選択したわけではなかったのである。

## 六　ヴィーン中央墓地の「赤ちゃんの墓」区画

かつて人びとを翻弄し続けた他界観は、第二ヴァティカン公会議を経た今では、カトリック神学の側から正式に否定された。また、カトリック教会が要求する倫理がそのまま社会的モラルになっていた頃と比べれば、現在その権威は、多様な価値基軸のうちのひとつでしかなく、その社会的影響力も低下した。そんななか、現在では子どもを亡くす喪失感に人びとがどのように向きあっているのか、それを本稿の締めくくりとして紹介

したい。[17] 具体的にはオーストリアの首都ヴィーンからの報告となる。現代社会における事例を、「規範に振り回され、がんじがらめになっていた」歴史的な事例と並置することで、「時宜を得ずに死んだ子ども」を取り巻く社会状況の変化（ないし不変化）を、より鮮明にする意図がここにはある。もちろん、参照軸があまりにも異なるため、厳密な比較検討の対象として両者を取り出すのは不適切だが、それでも、「子どもの遺族やそれを取り巻く人びとが、追悼のための制度が社会的に確立していない状況下でどのように反応するか、できるか」を切り口にするなら、対比的にみることは可能だろう。

オーストリアは、ドイツ南部のバイエルン州やバーデン・ヴュルテンベルク州と同様、伝統的にカトリック信者が多いことで知られ、首都ヴィーンも例外ではない。たしかに、一〇〇年前（ほぼ全住民がカトリック）と比べれば割合はかなり落ちたが、それでも今なお約半数がカトリックと申告して教会税負担を選択していることからも、その影響力は衰えていないと考えてよいだろう。

さて、ヴィーンの中央墓地（Zentralfriedhof）には、かつてであれば教会がコミュニティから排除した子どもたち、つまり誕生死や堕胎を含む胎児のみを埋葬する区画が用意されている。[18] この墓地を管理するのは中央墓地管理事務所（それまでの市営から、一九九九年に民営化）だ。この墓地は、「中央」とは名ばかりで、市内中心部からは市電で三〇分ほどのところに位置する。その総面積は二・四平方キロメートル（東京都千代田区にある皇居の一・七倍）にもなる、ヨーロッパでも最大規模の墓地なのだから、[19] 市の中心部からは遠いのも道理とうなずける。一九世紀に旧市街を囲んでいた市壁が取り壊され、市域が拡大していったことを受け、市内にあったいくつかの墓地をまとめて、一八六七年に新規に開設されたものだ。その際、元の墓地から移葬された著名人、たとえばベートーベンやシューマンなどの墓地もここにおかれていることから、現在では観光コースにもなっており、いわばヴィーンのひとつの顔ともいえるようなシンボリックな場所とも解釈できる。

その一角、区画三五Bにあるのが、「赤ちゃんの墓（Babyfriedhof）」の区画だ。広さは小学校のグラウンドくらい、一面芝生に覆われたこの区画は、実際よりも広々とした印象を受ける。遠目からみただけでは、ここがどのような場所なのかは全くわからない。区画の入り口に立っている「赤ちゃんの墓　ここにはあまりにも早くここにきた子どもたちが休んでいる」[20]と書かれた看板や、整然と並ぶ長方形の土の盛り上がり（棺を個別に埋めた痕跡）の小ささにあえて注目しなければ、この区画の特殊性に気づく者はまずいないくらい、開放的な空間だ。区画の中央にある「洋風あずまや」風のモニュメント、「悲しみのパヴィリオン」（Trauerpavillion）からは、区画全体が見渡せ、広大な中央墓地での散歩に疲れたときに少し休むのにちょうどよいと思わせるような、そんな造作になっている。

この区画の使用開始から一〇年に満たないこともあり、土地の大半はまだあいたままだ。じつはこの区画は、赤ちゃんの墓区画としては、中央墓地でも三世代目にあたる。オーストリアでも、埋葬が法的に義務づけられているのは生きて誕生した子どもだけで、誕生死や流産の場合にその義務はない。しかしヴィーン市では、埋葬が義務づけられていない子どもたちのために中央墓地の区画を無料開放し、市内で果てたこうした死者の埋葬を始めた。一九八五年のことだ。以来現在まで一貫して、「赤ちゃんの墓」区画への埋葬であれば、埋葬料および墓地の使用料はかからない。やがて最初に使い始めた二区画（三六および三七）がいっぱいになってしまったので、新しく設けられたのが、この区画三五Bである。使用開始は二〇〇〇年一二月で、それまではすべての子どもを土葬していたが、この区画に移動して以来、出生時体重が五〇〇グラム未満の場合は土葬をやめ、かわりに墓地内の施設で焼却処理の後、まとめて遺灰壺に納めて合同葬で埋葬されるようになった[21]（図3が埋葬される墓穴）。

合同葬「生まれる前に死んだ子どもたちの葬儀（Beisetzung für die ungeboren verstorbene Kinder）」は年四回行

われ、[22]葬られる「遺胎」の数は、時々でばらつきはあるものの、これまでのところ概ね二〇〜三〇程度にとどまっている。[23]それゆえ、仮にすべての子どもの当事者が各二人ずつ参列したとしても、参列者の数は六〇人程度にしかならない。筆者が実際に参列した二〇〇八年九月には、参列者数は幼児も含め三〇人（一二組）にとどまった。紙幅の都合で、そのときの様子の詳細は別項に譲るが、葬儀自体が一般的なキリスト教式で執り行われたことには言及しておく。具体的には、葬送ホールでの祈禱（Andacht）の後、墓所に移動して遺灰壺の埋葬となった。所要時間は、それらすべて含めても三〇分と少しで終わるくらいコンパクトなものだったが、当事者にとっては、時間の長短よりも、亡くした幼いいのちが存在したことを確認する機会の有無の方が、はるかに重要に違いない。もちろん、実際そのような機能を果たしているかどうかは、別の詳細な調査によらなければわからないので、本稿でできるのは、その可能性を指摘することだけだが。

## 七　赤ちゃんの墓区画という仕掛けと癒し

とはいえ、赤ちゃんの墓区画への埋葬や合同葬という機会を提供する側（ヴィーン市）の思いを、そこから読みとることはできるだろう。たとえば、図3で紹介した共同墓の墓石には、以下のような一編の詩が刻まれている。

【引用七　共同墓のエピタフ】

私の元へようこそ、そしてすぐに悲しいお別れ
あなたをこの腕の中に抱きながら。

わかっているのは、あなたが私の心の深いところに刻み
込まれているということ。
あなたは私にとって、紛れもなくかけがえない
一緒に過ごしたのはほんの一刻だったけれど、
それでもその時間は永遠に遺る。[24]

ジュリー・フリッチュ作[25]

幼子を失った母の悲哀が短い言葉の中に凝縮した、印象的な詩だ。ここに登場する母＝フリッチュは、失った我が子が彼女にとっていかにかけがえがなかったかを、詩の中で強く表明している。ただ、リフィアンやウルスベルク、アド・アルタ・ルペの母たちと決定的に違うのは、自分が抱える喪失の悲しみをこういうかたちで言語化できている、ということだ。作者フリッチュの悲しみは深いが、それでも、かつて母たちが抱かなければならなかった、聖別された墓地への埋葬の拒否という不当差別に由来するやるせなさはなく、ただ純粋に、喪失の悲しみがつづられているのである。

子どもたちを思う気持ちは、おそらくどちらもかわらないだろう。そして、いつの時代も、喪失感は、最終的には自分で処理する以外にはない。自分自身のこれからのために、我が子の安寧を思い、失ったという過去の事実をかみしめることで、未来を指向するという逆説。筆者は、このエピタフから、つまり、公共サービス

図3　ヴィーン中央墓地にある「火葬された子どもたちのための共同墓」。埋葬当日のため蓋が開いている。一番手前に、この日手向けられたリースがみえる。(2008 年 9 月 5 日、筆者撮影)

として子どもたちの埋葬に取り組むヴィーン市の姿勢から、そうした語りかけを読みとりたいのである。

現代は、自由選択の幅が拡大し、個人的な悲しみを癒すのに、社会から与えられる（宗教的）規範に振り回されることはなくなった時代ともいえる。合同葬に参列するかどうか自体も、当事者各々に委ねられている。悲しくないから、あるいは逆に場合によっては、悲しみが深すぎるからこそ参加しないという選択肢もあるだろう。我が子の手がかりを得る場としての墓碑はいつでもそこにあるのだから、埋葬儀礼が終わった後で、単独で自分（たち）なりのお別れをすることもできる。じつは、本稿では割愛したが、今回の合同葬終了後に、筆者は、参列者のうちの一組が仏教式の読経をするのを目にしている。彼らは、仏教徒なのにもかかわらず、キリスト教式で行われる葬儀にあえて参列したことになる。つまり、彼らにとっては、たとえ異なる教派の方式で行われる儀礼であっても、自分たちにとっては参加することで得られるものの方が多いと考えたからこそ参列したはずだ。

キリスト教式葬儀の最後にはっきり聞こえた誦経の声は、こうした現在の癒しの多様な可能性を象徴しているとも読めるのではないだろうか。

■註

1　なお、今日地元では、「景行天皇の九州遠征の際に水先案内をしたのが不知火だと日本書紀にある」という説明が好んでされるようだが、じつはこれでは「正体」の説明にはならない。

2　二〇〇八年九月二〇日のグローバルＣＯＥにおけるワークショップ「死者の記憶と表象のポリティクス」の際に、東京大学文学部東洋史学専修の大稔哲也准教授に頂いたコメントによれば、イスラーム圏では怪光・怪火に関する伝承はごく限られたものしかないという。その理由としては、あるいは、気候的な条件、つまり現在のアラブ圏の広範な

地域が乾燥気候（沙漠ないしステップ）であることが関連しているとも考えられる。

3 しかし、客観的事実である（と思われる）発光現象と「魂」という主観的な語りを、無検討に結びつける立場を、もちろん筆者はとらない。

4 この見解が変更されるのは、第二ヴァティカン公会議（一九六二年〜六五年）を待たなければならなかった。

5 原罪に関する指摘は、二〇〇八年九月二〇日のワークショップ「死者の記憶と表象のポリティクス」の際に、トゥルーズ大学人類学科のアルベール＝ロルカ教授に頂いた。ここに記して感謝の意を表す。

6 紀元二世紀前半にはほぼかたちが整ったとされるマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書には、キリストが伝道の際に起こしたとされる奇跡が数多く記されており、わけても奇抜なものとしては、死人を甦生させるという奇跡がある。「ヤイロの娘」[『マタイによる福音書』9, 18-19;『マルコによる福音書』5, 21-42;『ルカによる福音書』8, 40-56]「ナインの若者」[『ルカによる福音書』7, 11-16]、「ラザロの甦生」[『ヨハネによる福音書』11, 1-44] がそれにあたる。

7 首都だったのは一四二〇年まで。以後はインスブルックに遷都。

8 リフィアンを含む地元自治体、ブルクグラーフェンアムト（Burggrafenamt, イタリア語名 Burgraviato）の観光客向けウェブサイトで紹介されている伝説による。該当ＵＲＬは以下の通り。http://www.burggrafenamt.com/de/land-leute/passeierral/riffian.html

9 書き起こした原文は以下の通り。Gedenktafel zum Danke gegen die Gottes Mutter Maria durch deren Fürbitte ein todgebornes Kind, das schon 4 Tage im Grabe gelegen, die schönste weißrothe Gesichts Farbe bekam und die Lippe einiges farbiges Blut von sich gab, also die besten Lebens Zeichen, um es taufen und kirchlich begraben zu können. Die dankschuldigen Eltern.

10 アウクスブルクは、いうまでもなく、世界史上有名なかの豪商フッガー家の本拠地で、世界最古の私立の慈善住宅、フッガライ（Fuggerei）がすでに一六世紀前半に作られていたことでも知られる。一六世紀中頃に銀価格が暴落するまでは、非常に裕福な町だった。ここから三〇キロメートルほど西に位置するウルスベルクにその恩恵が届いていたかどうかはわからないが、この町の名が広く知られるようになるのは、アウクスブルクの栄光が陰った後である。

11 「erwecken（起こす、甦らせるの意）」、「Taufe（洗礼の意）」からなる合成語。

12 特殊な条件下での洗礼、の意か。Bedingung は条件の意。

13 原文は以下の通り。tougeborene Kinder an gewisse Gnadenorte oder zu undertätigen Bildern zu verbringen und dort auf Grund angeblicher Lebenszeichen zu taufen. [Prosser: 2005, 140]

14 南チロル、ボルツァーノから一〇キロメートルほど南下した山中にあるマリア・ヴァイセンシュタイン（Maria Weißenstein, イタリア語名 Pietralba）［Prosser: 2005, 141; Renzetti: 1993; Stürz: 1976］や、同じく南チロル北部山中のトレンス（Trens）［Prosser: 2005, 141; Renzetti: 1993］などのほかにも多数挙げられる。

15 原文は以下の通り。Lieber Gott, achr Kinder sind bei dir. So schenk das neunte mir.

16 乳児死亡率は、現在と比べればおしなべて高いが、それでも当時は、社会環境による差異も大きかった。たとえば、一九世紀当時オランダの政治・行政の中心地だったデン・ハーグの場合、一八五〇～五九年の乳児死亡率は二三・一パーセントだった。ちなみにこれは全国平均（二〇・四パーセント）より若干高い［Kok, van Poppel & Kruse: 1997, 196］。じつはデン・ハーグは、全出生中における非嫡出子の割合が一一・二パーセントもあり（一八五〇年頃の場合）、これが乳児死亡率とも関連しているという。一八五〇～六一年における一二ヶ月後の死亡率を、嫡出子と非嫡出子、認知されなかった私生児の場合で比較すると、各々二三パーセント、三四パーセント、三八パーセントとなる。［Kok, van Poppel & Kruse: 1997, 200-201］

17 中央墓地での子どもの埋葬状況については、中央墓地管理事務所（Verwaltung des Zentralfriedhofes）のルピッチュ氏（Frau Ruppitsch）へのインタビュー（二〇〇八年八月一六日）による。また、「赤ちゃんの墓区画」については、ヴィーン市公認観光ガイドのアブラハム氏（Hedwig Abraham）が個人運営するヴィーン紹介サイトでも紹介されている。このページにみられる風景は、筆者が実際にみたときに受けた印象にかなり近い。
http://www.viennatouristguide.at/Friedhoefe/Zentralfriedhof/Rundgang/05_Baby/z_baby.htm

18 むろん、こうした区画はヴィーン以外にも散見され、筆者が数年来フィールドとしているオーストリア南部ケルンテン州の州都、クラーゲンフルトの中央墓地にも同様の（しかし規模ははるかに小さい）区画がみられる。

19 ここより広い墓地は、ヨーロッパではハンブルクにしかない。また、埋葬者総数（三〇〇万体）はハンブルクよりも多く、これは今なおヨーロッパ最大である。そこに毎年二万人が新たに埋葬されている。

20 原文は以下の通り。Gruppe 35B, Babyfriedhof, Hier ruhen die Babys die viel zu kurz bei uns waren.

21 五〇〇グラム以上の場合は、荼毘に付してほしいという特別な希望がない限り、今でも個別に土葬されている。

22 毎年三、六、九、一二月の第一金曜日午前八時三〇分から、中央墓地内の第三ホール（Halle3）で行われることになっている。

23 その他五〇〇グラム以上だったがとくに希望して火葬になった場合も、同じ壺に入れられ、合同葬で弔われる。

24 原文は以下の通り。Ich heiße dich willkommen und gleichzeitig nehme ich in Trauer von dir Abschied, während ich dich in meinen Armen halte. Dich der mir wohlbekannt war, in der Tiefe meines Herzens. Da bist so wirkich für mich, für diese kurzen Momente und doch für alle Ewigkeit.

25 作者フリッチュは、息子を誕生死で亡くした彫刻家で、その悲しみを刻み込んだ彫刻をいくつか手がけている。この詩は、それらの写真と彼女自身の詩をまとめた"The Anguish of Loss"中の一編の独訳。カリフォルニアのサンタクルーズ在住。

■おもな引用・参考文献

『聖書』新共同訳、一九九三年。

川上　茂次『根獅子の里とおろくにんさま』平戸市まちづくり研究所（私家版）、二〇〇四年。

下野　敏見「南西諸島の海神信仰」、伊藤幹治（編）『奄美・沖縄の宗教的世界』（国立民族学博物館研究報告別冊、三号）、国立民族学博物館、一九八六年、九九～一二六頁所収。

高木　宏夫「ユタについて」、『人類科学』一九五七年（通巻九号）、一八八～一九三頁所収。

浜本　満「呪術――ある「非・科学」の素描」、『理想』一九八五年九号（通巻六二八号）、一〇八～二一四頁所収。

浜本　満「フィールドにおいて「わからない」ということ」『季刊人類学』一九八九年、二〇号（三）、二四～二五頁所収。

Anderegg, Klaus: *Durch der Heiligen Gnad und Hilf. Wallfahrt, Wallfahrtskapellen und Exvotos in den Oberwalliser Bezirken Goms und Östlich-Raron*, Basel: Krebs, 1979.

Corsini, Carlo A. and Pier Paolo Viazzo (eds.): *The decline of infant and child mortality: the European experience, 1750-1990*, Hague: Martinus Nijhoff Publishers, 1997.

Gélis, Jacques: Lebenszeichen-Todeszeichen. Die Wundertaufe totgeborener Kinder im Deutschland der Aufklärung. In: Jürgen Schlumbohn et al. (hrsg.): *Rituale der Geburt. Eine Kulturgeschichte*, München: Beck, 1998, S.269-288.

Henssen, Gottfried: *Volk erzählt. Münsterländische Sagen, Märchen und Schwänke*, Münster i/W: Aschendorff, 1935.

Imhof, Arthur Erwin: *Die verlorenen Welten. Alltagsbewältigung durch unsere Vorfahren und weshalb wir uns heute so schwer damit tun*, München: Beck, 1984.

Kok, Jan, Frans van Poppel and Ellen Kruse: Mortality among illegitimate children in mid-nineteenth-century The Hague. In: Corsini, Carlo A. et.al. (eds.): *The decline of infant and child mortality: the European experience, 1750-1990*, Hague: Martinus Nijhoff Publishers, 1997, pp.193-211.

Prosser, Michael: Friedhöfe eines 'unzeitigen Todes'. Tot geborene Kinder und das Problem ihres Bestattungsortes. In: Norbert Fischer/ Markwart Herzog (Hg.): *Nekropolis. Der Friedhof als Ort der Toten und der Lebenden* (= Irseer Dialoge; Bd. 10), Stuttgart: Kohlhammer, 2005, S.125-146.

Prosser, Michael: Erweckungstaufe. Säuglingssterblichkeit und Wallfahrt für tote Kinder in vormoderner Zeit. In: *Bayerisches Jahrbuch für Volkskunde,* 2003, S.101-138.

Renzetti, Emanuela: Pellegrini nella morte: resurrezioni temporanee e battesimi nei santuari del Tirolo. In: *Archivio storico ticinese*, n. 114, 1993, p. 223-246.

Stürz, Peter: (Ohne Titel), In: *Der Schlern*, Heft 50, 1976, S.333-341.

Temme, J.D.H.: *Die Volkssagen von Pommern und Rügen*, Berlin: Nicolai. 1840.

Theopold, Wilhelm: *Votivmalerei und Medizin*, München: Thiemig, 1978.
Thoma, Ludwig: *Gesammelte Werke*, 6.Band. München: Piper, 1956.

（しまうち・ひろえ　グローバルＣＯＥプログラム特任研究員）

# Zum Gedenken Vorzeitig Verstorbener Kinder: Irrlichter, „*Erweckungstaufe*" und Beisetzungsrituale

Hiroe Shimauchi

Das Thema dieses Artikels ist wie in der katholischen Kirche vorzeitig verstorbene —vor allem totgeborene— Kinder behandelt wurden und was die Hinterbliebenen gegen die Trauer um diese verstorbenen Kinder getan haben. Das Augenmerk dieses Artikels ist auf den europäischen (christlichen) Raum beschränkt, um das Thema nicht zu breit und deshalb zu vage werden zu lassen.

In der katholischen Kirchenorthodoxie verhinderte die Lehre von der Erbsünde, das ein Kind ohne Taufe in geweihter Erde begraben werden konnte. Gemäss dieser Lehre konnte ein totgeborenes Kind nicht in den Himmel gelangen und musste statt dessen als Heide im Limbus verbleiben. Diese Vorstellung wurde von den Hinterbliebenen (den Eltern, Verwandten und auch Hebammen) nur ungern akzeptiert. Sie wollten erreichen, das ihr Kind trotzdem in den Himmel gelangt, da sie ansonsten selbst nicht zur Ruhe kommen konnten. Genau diesem Zweck diente die Erweckungstaufe: Durch die wundersame Kraft der Heiligen wurde ein toter Säugling „wiedererweckt" und dann getauft. Solange man am Körper und im Gesicht des Kindes Spuren fand, die als Lebenszeichen gedeutet werden konnten, wurde es als lebendig betrachtet und einer Taufzeremonie unterzogen.

Dieses magische Ritual wurde in Südtirol, in Süddeutschland, in Frankreich, in der Schweiz und weiteren Regionen Europas praktiziert. Da dieser Ritus sehr „abergläubisch" wirkte, wurde er Anhängern der Kirchenorthodoxie häufig verurteilt. Trotzdem existierte dieser Brauch bis in die Mitte des 18.Jh. oder bis

in noch spätere Zeiten. Einer der vielen Gründe dafür war vermutlich die hohe Sterblichkeit der Kinder. Ein weiterer Grund, und vielleicht der wichtigste, mag in der Kirchenlehre selbst begründet liegen. Einerseits lehnten die Vertreter der Kirchenorthodoxie die Möglichkeit der Auferweckung totgeborener Kinder durch den magischen Ritus ab, verkündeten andererseits aber die Auferstehung Christi. Ihr Standpunkt war in diesem Sinne widersprüchlich.

Religion bietet normalerweise die Hoffnung auf Erlösung. Konkreter gesagt bietet Religion spirituelle Unterstützung in Zeiten der Not. Menschen brauchen in schwierigen Situationen eine Hoffnung, an die sie sich klammern könne. Die Kirchenorthodoxie lieferte jedoch im Fall von totgeborenen Kindern diesen Trost nicht. Deshalb gab es eine grosse Nachfrage für die Erweckungstaufe. Die Kirche, die zu dieser Zeit zwischen magischen religiösen Praktiken und dem Einfluss der Aufklärung schwankte, verursachte in dieser Weise selbst die Notwendigkeit für die Durchführung von Erweckungstaufen.

Heutzutage erkennen die Kommunalverwaltungen manchmal die Bedürfnisse der Hinterbliebenen von vorzeitig verstorbenen Kindern an: im Wiener Zentralfriedhof, beispielsweise, befindet sich ein Bezirk namens „Babyfriedhof", wo prinzipiell nur totgeborene Kinder beigesetzt werden. Die in der katholischen Lehre von der kirchlichen Gemeinde ausgeschlossenen Kinder können dort ihre Ruhe finden. Es lässt sich deshalb sagen, das in diesem spezifischen Fall das tiefe Wehleid der Hinterbliebenen der Vergangenheit angehört.